

メトロポリタン史学会 第五回総会・大会のお知らせ

来る4月18日(土)に、下記の要領でメトロポリタン史学会の第五回総会・大会を開催します。総会では創立以来の活動を振り返り、より一層充実した会活動を目指して新しい方針を決めたいと思います。また大会では、「時の支配と時間意識」をテーマにシンポジウムを行います。会員の皆さんの参加をお待ちしております。

日時 2009年4月18日(土) 午前10時30分～午後5時30分

会場 首都大学東京(東京都立大学)本部棟1階・大会議室
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)

日程 ①総会：午前10時30分～12時

②大会：午後1時～5時30分 シンポジウム「時の支配と時間意識」

〔報告者〕

佐藤正幸氏(山梨大学)

「なぜキリスト教紀年法は世界共通紀年法になることができたのか」

工藤元男氏(早稲田大学)

「中国古代の「日書」にみえる時間と占ト」

医王秀行氏(東京女学館大学)

「預言者ムハンマドとイスラム暦」

成田龍一氏(日本女子大学)

「明治国家の時間/国民国家の時間/大日本帝国の時間」

③懇親会：午後6時～(会費4,000円)

〔シンポジウムの趣旨〕

歴史学は、人類の歩んできた多様な「過去」の世界を探求してきた。その中で、「過去」を規定する「とき」ないし「時間」は世界各地においていかにとらえられてきたであろうか。「とき」は、異なる諸文明においていかに統制されてきたのであろうか。そしてまた、いかなる秩序をそれぞれの文明にもたらしてきたのであろうか。こうした問いを背景に、1990年代以降進展しつつある「時間の歴史」研究の動向を見据えながら、本シンポジウムでは、宗教や政治の支配者、民衆にとっての「とき」の意識、暦法や時法といった「とき」を司る原理の諸文明における多様性を比較考察する場を設定してみたい。報告者・パネリストの方々には、中国、イスラム、日本などにおける「とき」の意識とその統御のあり方を論じていただき、諸文明、諸時代をつらぬく「とき」の支配と時間意識の位相を様々に考察する手がかりとしたいと思う。

メトロポリタン史学会第四回総会・大会報告

昨年の4月19日（土）に、首都大学東京（東京都立大学）大会議室において、メトロポリタン史学会の第四回総会・大会が開催されました。参加者は31名でした。

午前10時、小谷汪之氏を議長に選出して総会が始まり、2007年度活動報告、決算報告、監査報告、2008年度活動方針案・予算案が順次提案され、それぞれ採択されました（後掲議案書参照）。

午後は、「民衆運動と宗教」をテーマにシンポジウムが開かれました。内容は以下の通りです。なお報告は会誌『メトロポリタン史学』第4号（2008年12月刊）に特集論文として掲載されましたので、ご覧下さい。

- 小澤 浩氏（元富山大学） 「幕末民衆宗教の歴史的意義——その再検討に向けて」
趙 景達氏（千葉大学） 「植民地期朝鮮におけるキリスト教系終末運動の展開と民衆」
大塚和夫氏（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所）
「宗教/政治運動と民衆/大衆——中東ムスリム社会の事例を中心に」
増谷英樹氏（獨協大学） 「1848年革命とユダヤ教徒」

メトロポリタン史学会第4回総会議案書

2008. 4. 19

[メトロポリタン史学会 2007年度活動報告]

2007.4~2008.3

1. 会誌『メトロポリタン史学』第3号を2007年12月に刊行し、史学科のある大学を中心に約80機関に寄贈した。
2. 研究会を1回実施した。
2007年7月14日 報告者：澤田秀実・若林明氏、参加者7名。
3. 第3回秋季シンポジウム「地域世界論の新地平」を、2007年11月17日（土）に実施した。
参加者27名
4. 第2回歴史探訪「戦争の記憶をたずねて——東京大空襲と下町」を2007年10月7日（日）に実施した。
参加者16名、講師：山辺昌彦氏
5. 第1回秋季シンポジウムの報告集『歴史の中の移動とネットワーク』を、メトロポリタン史学叢書1として、2007年12月15日に桜井書店から刊行した。
6. 第4回総会・大会（2008年4月）の準備を行った。
7. 会報5号（2007.10.15）、6号（2008.3.20）を発行した。
8. 会員数は現状維持にとどまり、拡大目標（180名）を達成できなかった。

[メトロポリタン史学会 2008年度活動方針案]

2008.4~2009.3

1. 会誌『メトロポリタン史学』第4号を2008年12月に刊行する。
2. 研究会・書評会等を実施する。
3. 第4回秋のシンポジウムを2008年11月29日（土）に行う。

4. 第2回秋季シンポジウム報告集『いま社会主義を考える——歴史からの眼差し』と、第3回秋季シンポジウム報告集『地域世界論の新地平』を、それぞれ『メトロポリタン史学叢書』2、3として桜井書店から出版する。
5. 第3回歴史探訪を10月もしくは11月に実施する。
6. 第5回総会・大会（2000年4月18日）の準備を行う。
7. 180名を目標に会員拡大に努め、会財政の確立を図る。

[メトロポリタン史学会 2007年度委員名簿]

任期：2007.4～2009.3

会 長：佐々木隆爾

副 会 長：峰岸純夫、増谷英樹、青木哲夫、小谷汪之

事 務 局：木村 誠（事務局長）、赤羽目匡由

編 集：河原温（責任者）、奥村哲、佐々木真、澤田秀実、新村恭、月脚達彦、福田千鶴、山田朗

企画・研究：中野隆生（責任者）、小野昭、角田三佳、川合康、趙景達、橋谷弘、林田伸一

監 事：立石博高、木村茂光

メトロポリタン史学会 2007年度決算報告

2007.4～2008.3

[収入]

			2007予算	2007決算
前年度繰越金			135,145	135,145
会費			837,000	482,000
	2005年度	(現金)	-	0
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	5,000
	2006年度	(現金)	-	27,000
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	25,000
	2007年度	(現金)	-	98,000
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	294,000
	2008年度	(現金)	-	3,000
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	25,000
	2009年度	(現金)	-	0
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	5,000
雑収入			321,884	322,479
	談話会寄付		321,884	308,572
	会誌売り上げ		-	2,290
	叢書売り上げ		-	8,640
	銀行口座利息		-	102
	大会懇親会費黒字		-	2,875
計			1,294,029	939,624

[支出]

		2007予算	2007決算
会誌制作費		500,000	393,750
郵便料金		136,800	106,695
	会誌発送	46,800	42,525
	大会案内・会報等発送	80,000	61,670
	葉書	10,000	2,500
	切手	-	0
	その他	-	0
事務用品代		20,000	9,259
賃金・旅費		50,000	42,000
叢書1購入代金	20部		45,360
雑費		-	11,366
	振込手数料	-	420
	録音用メモリー・乾電池	-	298
	弁当・お茶・紙コップ	-	7,908
	秋季シンポ懇親会赤字 補填	-	2,500
	駐車場料金	-	240
予備費		587,229	0
次年度繰越金		-	331,194
	現金	-	47,204
	銀行	-	44,540
	郵便振替	-	239,450
計		1,294,029	939,624

●会員数 152名(一般 136名 学生・院生 16名)

●会費納入率 07年度・91/152=59.9% 06年度・123/149=82.6% 05年度・140/147=95.2%

メトロポリタン史学会 2008年度予算

2008.4.1~2009.3.31

[収入] 1,168,194

前年度繰越金		331,194
会費		837,000
一般会員	5,000 × 140	700,000
学生・院生	3,000 × 18	54,000
未収分	5,000 × 16	83,000
	3,000 × 1	
* 予定会員数: 180名(一般 160, 学生・院生 20)		
合計		<u>1,168,194</u>

[支出] 1,168,194

会誌制作費		500,000
郵便料金		136,800
会誌郵送	180 × 260	46,800
大会案内・会報等発送		80,000
葉書・切手		10,000
事務用品代		20,000
賃金・旅費		50,000
雑費		20,000
予備費		441,394
計		<u>1,168,194</u>

2008年10月12日（日）に、第3回歴史探訪「東京の穆斯林とイスラーム施設」が実施されました。当日は、日本における最初の穆斯林団体である日本穆斯林協会や東京にあるモスク（礼拝所）を訪問し、東京の穆斯林の歴史や活動などを学びました。生まれて初めてモスクに足を踏み入れる人も多く、「未知との遭遇」にちょっと興奮気味でした。参加者の森さんに参加記を寄せていただきましたので、以下に掲載します。（事務局）

【第三回歴史探訪「東京の穆斯林とイスラーム施設」参加記】

森 健一（鹿児島第一高校教員）

今年はメトロポリタン史学会主催でイスラーム施設の見学という一日企画で期待するところ大であった。10月12日（日）代々木上原駅に集合したのは14名で、今回、案内してくださるのは、中東・シリアを研究する森山央朗氏である。駅から近い住宅街にある東京モスクを始めに複数のモスクを訪問、見学するにあたって、肌を露出せぬよう服装の注意、指示もあり、やや緊張してのスタートであった。東京モスクは1938年に建てられ、トルコ政府の後援を受けて1999年に現在のように改修、新装された。白い壁にステンドグラス、建物に入ると内装もまた美しい。屋上から絨毯の敷かれたホールから中央のドームを見上げた。



トルコ政府の職員でもある日本研究者から同施設の由来など説明を受ける。戦前においては旧軍部らが主導して「回教圏研究」としてトルコとの交流機関を設立しことが特筆されるだろう。ついで住宅街を抜けて日本イスラーム協会を訪問する。マンションの一室にあり、協会代表の方は自ら外務省職員としてイスラーム地域に滞在するなかで信仰心が芽生えたことや近年では国際結婚して穆斯林となる日本人女性が増えていること、国際的な奨学制度もあって留学先としてイスラーム地域に向かう若者が多いと語られた。2001年の「9・11同時多発テロ」に言及して一部の若者が教義や信仰とはかけ離れた行為に走り、実に残念なこと

あると慨嘆されていた。3 番目に最寄りの代々木駅から大塚モスクを訪問した。ここは歴史教育者協議会にも近い所で今回は委員長であった石山久男氏も参加されている。紅茶とナツメヤシの干菓子を頂戴しながらさきの協会代表から説明を伺う。参加者一同は、氏の了解を得て夕方 5 時のサラート（礼拝）の場にも同席させていただいた。数年前に 4 階建ての民間ビルを 4500 万円で購入、不足の半額を中東・石油産油国の王室から後援されたことやパキスタン系のムスリム・コミュニティが形成されている、池袋周辺の土地柄など東京近郊のムスリムの生活と信仰の現状をイスラーム的に処理されたハラール食品の話題なども適所に入れながら興味が持てる語り口であった。この一日参加の後、片倉ともこほか『イスラーム世界』（岩波書店、2004 年）を読んで、基本知識のおさらいをしたが今も興味は尽きない。数年ごとに鹿児島から空路、参加させてもらっているが 10 月連休中日の史談会企画はいつも良質でぜひ継続してほしいと思っている。

【歴史随想】

南京ハカ話

奥村 哲（首都大学東京、中国近現代史）

南京は三国時代の呉以来、多くの王朝や政権が興亡した、中国の古都である。筆者は 1987 年以来何度かここを訪れ、とくに初めて長期海外研修をした 1993～94 年には、数カ月滞在した。その間、市内は自転車で縦横にまわり、バスやタクシーで近郊のいくつかの史蹟めぐりもした。栄枯盛衰とはいうものの、すべては滅びゆき、夢の跡を残して永遠の眠りにつく。筆者が訪れたのも多くは古人の墓で、今日はそのうちのいくつかをご案内することにしよう。墓なんてと馬鹿にしないで、にわか墓ハカセにしばしお付き合いください。

明の孝陵とその周辺 まずは有名な観光地から。何度も都がおかれた理由の一つは、南京が天然の要害だからである。西から北へ長江がゆったりと湾曲して天然の堀となり、北と東にはさらに山が迫る、いわゆる「虎踞竜蟠」（虎がうずくまり、竜がとぐろを巻いて睨んでいる）の地で、だから南側の防御さえ固めればよい。そうした要害の東側にそびえ、とぐろを巻いた竜の主要部分を構成しているのが、紫金山である。その南側の斜面は北が高く南が開けた、風水絶好の地であり、古来多くの墓がここに設けられた。江南から興って全土を統一した最初で最後の王朝である、明朝の創始者洪武帝・朱元璋も、その西側山腹の麓近くで眠っている。明の孝陵である。1383 年にいったん完成し、98 年に朱元璋が亡くなって葬られる。



1. 明の孝陵の参道

その後、第 3 代の永楽帝が整備し、1413 年に麓に四方城を建造して、その中に朱元璋の功績を讃える「大明孝陵神功聖徳碑」を安置して完工した。四方城から陵の下馬坊までも、碑亭や大金門など多くの建築物があり、当時はそれらを全長 22.5 キロの赤い塀と 10 万本の松が取り囲み、千頭の鹿が飼われ、南側には孝陵衛という駐屯地が作られ、1 万人の兵士が守っていたという。



2. 四方城の「大明孝陵神功聖徳碑」

本体にいたっては、幅 10.7m、厚さ 4.4mで、長さ(立てたときの高さ)は実に 49.4mもある。使用石材の大きさでは、まさしく世界最大の石碑になるはずであった。しかし結局は途中で放置され、現在の碑は高さ 10mそこそこしかない。何故か？単純至極、今日の技術をもってしても、重すぎて運べないからである。父の墓のために 図ったとはいえ、なんとも馬鹿馬鹿しく浅はかであった。

南京城東北の太平門を出ると、紫金山の西北の麓に、常遇春・徐達・李文忠ら、朱元璋に仕えた功臣たちの墓がある。彼らは朱元璋がライバルを倒し、モンゴル勢力を北に追い払うのに、大きな功績をあげた。しかし、多くの功臣の末路は哀れであった。猜疑心かられた朱元璋が、次々に粛清していったからである。もっとも信頼していた徐達でさえ、その最期は次のようであった。「洪武 18【1385】年 2月、徐達が背中



4. 徐達の墓

「大明孝陵神功聖徳碑」などの石材は、南京城の中山門から東 25 キロ、江寧県の湯山鎮という町のはずれにある、陽山という採石場から切り出された。永楽帝は、甥の第 2 代建文帝を倒して即位している。皇位篡奪の誇りを塞ぐためにも、父の洪武帝を豪華に祀ることによって、正統性を誇示しようとしたのであろう。陽山には、3 つの巨大な石材が、切り出しの途中で放置されている。それは本来、「神功聖徳碑」になるはずの石材であった。まず碑の台座として、「鼉負」(ひき)といわれる伝説上の海亀が置かれる。それを彫るための石材は、長さ 30.35m、幅 16m、厚さ 13mもある。碑の頭の部分は長円形で、高さ 10.7m、幅 20.3m、長さ 8.4mで、18 匹の竜が彫りかけのまま残されている。



3. 陽山の残存石林. 左側が頭の部分, 右側が本体

腫物の悪化により歩行困難となり、病の床に臥すことになった。元璋はたびたび良医を遣わしては病状を気遣い、さも心配している風であった。そのかいあってか徐達の病気も快報に向かい、このまま持ち直すかに思われた。ところがある日元璋から徐達のもとに、見舞いと称して蒸した鷲鳥が送られてきた。鷲鳥は腫物にとって最大の毒である。元璋の意のある所を悟った徐達は、もはや逃れられぬことを知り、使者を前に涙を流しながら鷲鳥を口にしたという。それから数日して容体が急変し、そのまま息をひき

とった」(檀上寛『明の太祖朱元璋』、白帝社、1994年)。徐達の心境や、推し量るべし。

さて、孝陵への参道の両側には、石造りの文官と武官、そして象・馬・獅子・駱駝などが並んでいる(石像路)が、参道は四方城から真っすぐ孝陵には向かわず、小高い丘の西側を大きく迂回している。その小高い丘、梅花山こそ、魏の曹操や蜀の劉備と覇を争った、呉の孫権が眠る地である(梅花山孫陵)。孝陵が設計された時、参道がここにぶつかるために、担当者は孫権の墓を他の場所に移すよう建議した。しかし朱元璋は言った。「孫権も好漢だから、残して朕の門番をさせよう」と。こうして前面にあった石麒麟が移されただけで孫陵は残り、今日、名前のおり山上に梅が咲き誇り、市民に春の訪れを告げている。梅は南京の市花である。



5. 孫権の墓. 右の丘が梅花山

2つの革命聖地 近代になって、孝陵の東の紫金山の山腹に、さらに壮大な陵墓が建設された。中華民国建国の父、国民党の創設者、孫文の中山陵である。1925年3月に北京で亡くなった孫文の遺骸は、遺志に基づいて、国民党による全国再統一後の1929年6月、ここに安葬された。



6. 中山陵入口

碑坊から392段の参道を上り、陵門・碑亭を過ぎると、祭堂と墓室に到着する。国民党の旗、青天白日旗を連想させる、真っ白の壁に青い瑠璃瓦が輝く祭堂は、南京市を見下ろすように建っており、内部には孫文の座像が安置されている。

中山陵よりかなり東、紫金山の東南の山腹には、靈谷寺がある。南朝の梁代に創建された靈谷寺は、孝陵を造営する際、その東側に移築された。当時の建物はわずかに無梁殿を残すのみであるが、国民党は無梁殿と孝陵の

間に中山陵を造営するとともに、無梁殿一带を国民革命に命を捧げた将校や兵士の共同墓地に指定し、仏像をすべて東にある、曾国藩が創建した龍王廟に移した。これが現在の靈谷寺である。無梁殿の上の方には、八角形で9層、高さ約60mの「陣亡将士紀念塔」(靈谷塔)が築かれ、無梁殿も「陣亡将士紀念堂」と改められ、四壁にはめこまれた110の石碑には、3万3千人余りの「陣亡将士」の名が刻まれた。また靈谷寺の東には、国民党の2人の大物、譚延闓と鄧演達の墓があり、孝陵より西にも廖仲愷・何香凝夫妻の墓がある。

さて、孝陵の入口東側の細い山道を少し歩くと、北宋の政治家王安石の定林山荘があり、そこからなお数十m行くと、紫霞湖という静かな池がある。その東岸から紫金山を登っていくと、まもなく正気亭というあずまやがある。その位置は孝陵と中山陵のほぼ真ん中で、高さは孝陵よりは相当高く、中山陵よりはやや低い。自己を朱元璋より高く、しかし孫文よりは低く位置付けざるをえなかった男が、この地を墓地として確保し、正気亭を建てた。蒋介石である。時は共産党との内戦で優勢であった1947年4月。しかし後から見れば皮肉にも、この頃から戦況は変わりつつあった。翌年には完全に逆転し、結局大陸を追われた蒋介石は、

今、台湾の台北から少し離れた慈湖という地で、永遠の眠りにについている。蒋介石としては、墓地さえ確保すればあとはボチボチと見計らったのだろうが、図らずも結果ははかばかしくなかった。

国民党の革命の聖地が靈谷寺一帯であるならば、共産党のそれは雨花台烈士陵园であろう。南京の弱点である南を固める門、中華門の南に広がり、雨花石と呼ばれるきれいな石を産し、南宋の詩人陸游に江南第二泉と称賛された泉もあるこの地が、国民政府時代には血生臭い処刑場となり、鄧中夏・恽代英ら、10万を越える共産党員や活動家がここで処刑された。共産党が勝利し、中華人民共和国が建国された後に、彼ら革命に生命を捧げた人々を慰霊するとともに、国民に革命の教育をする場所として、烈士陵园が整備されたのである。広大な園内には、処刑場所である北・東・西の「殉難処」や、「南京解放」が1949年4月23日である



7. 雨花台烈士陵园. 遠くに見えるのが烈士紀念碑

ることから高さを42.3mにした烈士紀念碑、そして「烈士史料陳列館」など、当然のごとく共産党関係の建造物などが目立つが、それ以外の史蹟もひっそりと存在している。永樂帝の皇位篡奪を正当化する詔の起草を拒否したため、もっとも残酷な刑である凌遲処死にあった方孝孺の墓、高宗が杭州に逃れた後も金に降らなかったため、生きながら心臓をえぐられた南宋の「楊邦義剖心処」、戦場で死んだ人と馬をともに葬った「辛亥革命雨花台之役人馬合塚」等々がそれで、主要ルートを外れた東の片隅にあるため、気をつけないと見逃してしまう。

次に、やや国際的な墓を紹介しよう。東北の太平門を出、徐達ら明初の功臣たちの墓を過ぎ、なおも紫金山の北麓を行くと、航空烈士公墓がある。ここには、主に抗日戦争の際に犠牲になったパイロットが葬られ、中国人163名その他、アメリカ人1名、ソ連人4名が眠っている。

アメリカ人は陸軍中尉ロバート・ショート（中国の表記は肖徳）で、1932年の上海事変の際、蘇州上空で撃墜された。ショートは前年に、太平洋横断飛行で来日している。その彼が、日本が空戦史上最初に撃墜した男になるとは、当時誰が予想しただろうか？



8. 航空烈士公墓



9. ロバート・ショートの墓

ソ連人は航空義勇隊大隊長のラフマノフ（爾拉夫孟諾）とパイロットの史托維・盧八丁・金爵洛哥（いずれも原名はわからなかった）で、筆者の写真によれば、1938年6月から1940年1月にかけて、江西省の南昌付近や広西省の南寧付近で亡くなっている。ソ連は抗日戦争初期に、中国に対して唯一本格的な軍事・経済援助を与えた国であったが、とくに航空機と航空義勇兵の支援は、空軍がとりわけ弱体な中国にとって大きな戦力になった。このため、約200名のソ連人義勇兵が生命を失い、南京の他、南昌・武漢・重慶・西安・桂林・蘭州などに葬られている。異国のやや日当たりの悪いこの地で、彼らは冷戦や中ソ対立、そしてソ連が解体した今日の世界を、どんな思いで見つめてきたであろうか？

2人の「漢奸」 最後に、南京に関係が深い2人の人物に触れたい。杭州の西湖の湖畔に、南宋の「忠臣」岳飛の墓（岳王廟）があり、その境内には、主戦派の彼を殺して金と講和を結んだ秦檜夫妻らの像が、裸で後ろ手に括られ跪いた姿で置かれている。人々があまりにこの像を殴り唾を吐きかけるため、現在は柵で囲まれてしまった。この「悪役」秦檜は、南京市に属する江寧県出身である。彼の墓は南京から南に車で1時間余り、安徽省との境界に近い、江寧県銅井郷の牧龍鎮に築かれた。筆者は安徽省の馬鞍山（項羽の愛馬、騅の鞍をここに埋めたと伝えられる）市にある李白の遺跡を訪れる途中、タクシーで牧龍鎮を通過した際、近隣の山野に眼を凝らしたが、無論見つかるはずもない。南宋の時代にすでに荒れ始め、明代にはまだ石人や石馬は残っていたが、おそらく女真族の清朝の時代に一層の荒廃が進んで、今日ではまったく跡形もないからである。



10. 秦檜夫妻の像

次のような話が残っている。「穢塚」と呼ばれた秦檜の墓を守るべき子孫は、彼の後裔であることを隠すため、秦の字を解体・再構成した徐に改姓したというのである。秦の字を分解すると、三人の下に禾がある。徐の偏は人2つに相当し、右の傍の上にもう1つ人があり、その下に禾がある。つまり、秦も徐も三人に一禾を加えるのであり、世間に気づかれぬ形で先祖の姓を残したのだというもので、話としては面白いが、おそらく史実ではなかろう。ともかく、このような話が伝えられるほどに、「漢奸」秦檜は憎まれ、現在に至っているのである。

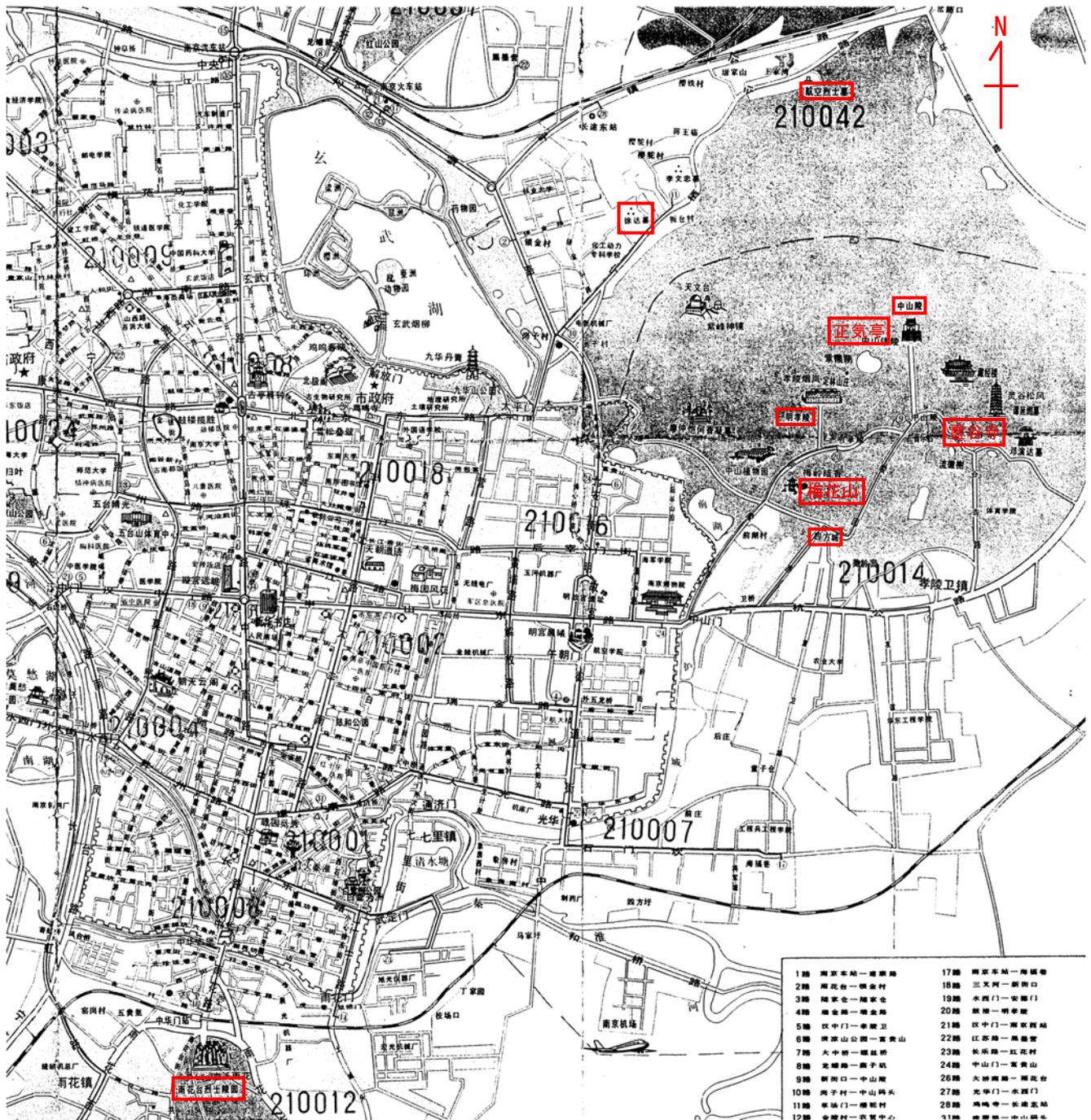
しかし、現在の中国の公式見解では、中国は満州（女真）族も漢族も含むより広い中華民族の国で、古代からそのような統一された多民族国家であったとされている。であれば、金と南宋の抗争も、侵略というよりは同じ中華民族内の諍いだ、という解釈も可能になろう。とすれば、内部の対立と戦争を煽る岳飛よりも、平和的に解決した秦檜の方を評価したいという学者が、1人くらいは現われてもおかしくはない。しかしそうした話は聞いたことはないし、秦檜の像は今後も多くの唾を浴び続けるであろう。そのあたりに、現代中国のナショナリズムの建前と本音が、見え隠れしているように思われる。

秦檜が前近代の「漢奸」の代表とすれば、近現代の代表とされるのは、汪兆銘（精衛）であろう。孫文の腹心として活躍し、蒋介石のライバルであった汪兆銘は、日本が中国を全面的に侵略した時、重慶を脱出して日本占領下の南京に戻り、中国でいう「偽中華民国国民政府」を樹立した。国際的支援も弱い状況では抗日に展望はなく、いたずらに戦争を長引かせるだけだから、日本にある程度譲歩しても、国民と国土の犠牲を少なくした方がよい、という判断であろう。しかし、日本は彼を「聖戦の大義」に利用しただけで、実権はほとんど与えなかった。意に反して傀儡政権の長となった汪兆銘は、1944年11月、日本と我が身の没落

をひしひしと感じる失意の中で、名古屋で客死する。遺骸は南京に運ばれ、「国葬」が行なわれた。埋葬地はすでに登場した孫権の墓、梅花山の山頂である。しかし翌年8月、日本は連合軍に降伏し、5ヵ月後の1946年1月、国民政府が派遣した工兵隊によって墓は爆破され、遺骸は焼却された。現在では、跡地の案内板にその旨を留めるだけである。彼の主観的意図がどうであれ、結果としては前途を見誤り、敵に利用されて国民を裏切る形になったことは、政治家として責任は免れられないであろう。

それにしても、一国の宰相を務めた秦檜と汪兆銘が、ともに「漢奸」の汚名にまみれ、もはや安息の地さえない。これぞまさしく、はかない話である。

〔南京市街図〕



2008年6月28日(土)に、メトロポリタン史学叢書1『歴史の中の移動とネットワーク』(桜井書店、2007年)の書評会が行われました。執筆者の一人である清水有子さんに参加記を書いていただきましたので、以下に掲載します。

【書評会参加記】

清水有子(首都大学東京非常勤講師)

2008年6月28日(土)首都大学東京人文学部棟147号室にて、メトロポリタン史学会編『歴史のなかの移動とネットワーク』(メトロポリタン史学会叢書1、桜井書店、2007年)の書評会が行なわれた。参加者は計12名。評者の近藤信彰氏(イラン近代史)、伊川健二氏(日本中世史・対外交渉史)、徳橋曜氏(イタリア中世史)のほか、『歴史のなかの移動とネットワーク』から編者の中野隆生氏、執筆者の森山央朗氏、亀長洋子氏、北村暁夫氏、清水が出席した。ほか会長の佐々木隆爾氏をはじめ小谷汪之氏、河原温氏、木村誠氏、赤羽目匡由氏の各会員が参加した。

まず当日の進行状況を記しておきたい。司会は河原氏が担当し、全員の自己紹介ののち、論文毎に書評と執筆者からの応答がなされた。最初に近藤氏から本の意義や位置づけなど総括的な評価がなされ、個別評価として東アジアに関する論考三本(森山氏、帆刈浩之氏、清水)が取り上げられた。これに対して、森山氏から回答があった。続けて伊川氏が清水論文を評価し、清水は近藤氏の評価とあわせてこれに回答した。最後に徳橋氏が、亀長氏と北村氏の論考を取り上げ、各氏の回答がなされた。この間10分ほどの休憩があり、かかった時間はほぼ予定通りの3時間弱であった。当事者の筆者の感覚としてはあつという間である。

筆者は書評会は初めての経験であった。しかも著者として批判の対象となることにやや不安な気持ちで当日臨んだが、実際に参加すると、次のような書評会の良さを体得でき、充実感あふれるものであった。

第一に、対面して意見を交換することのメリットである。言うまでもないが書評の意義は、専門家の目で、ミスや誤りがあれば指摘してもらい、研究の価値をより高める方向で批判してもらうことにある。書評会では、直接面と向かって批判を受けるが、そのほうがお互いにやりやすいし、誤解も少ないと感じた。紙面の書評は、長期間活字として残り、不特定多数の目にさらされるという特性から、執筆者には、このような表現はあらぬ誤解を招くのではないか、自分ではそんなつもりはなくても著書の評価を不当に下げることになりはしまいか、というプレッシャーがとかくつきものである。書評会の最大のメリットは、このようなプレッシャーから解放され、比較的率直に自分の意見を開陳できる点にあるといえよう。批判を受ける側も、その場で対応し「なぜそうしたか・考えたか」を説明できるので、素直に批判を受け入れる心理状況になる。当日筆者は伊川氏をはじめとする各氏のご意見を頂いたが、たいへん勉強になり、考えを新たにすることがあった。

第二のメリットは、執筆からしばらく間をおいて読み返す機会を得ることで、当時はなかった論点や視点が浮上することである。執筆者は多かれ少なかれ当初とは違う環境下で論文を読み直している。森山氏、亀長氏、北村氏は、とくに最近の研究成果を踏まえた貴重な応答をされており、学問的に発展性ある有意義な会となった。筆者自身もまた、書評会に備えることで新しい論点を見出すことができた。

以上のように、筆者にとってたいへん充実した書評会であった。当日参加された皆様に、改めて感謝申し上げます。またそう遠くない将来に、「メトロポリタン史学会叢書2」の書評会が開かれることを願っている。

【投稿のお願い】

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回12月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年8月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
 - ①論文(図表を含み、24,000字以内;英文の場合は、8,000語以内)
 - ②研究ノート・史料紹介(同 12,000字以内;英文の場合は4,000語以内)
 - ③学界動向(8,000字以内;英文の場合は2,700語以内)
 - ④時評・提言(4,000字以内)
- (5) 論文、研究ノート(縦書き、横書きいずれも可)には、欧文で要旨(300語以内)を添付する(原文が英文の場合は日本語要旨800字以内)。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿(表、図表を含む)3部、フロッピーディスク及び別記送り状*(1部)を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り50部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系

国際文化コース(歴史・考古学分野)、河原 研究室 気付

『メトロポリタン史学』編集委員会

Tel: 0426-77-2119 (河原研究室) Fax: 0426-77-2112

E-mail: kawahara@comp.metro-u.ac.jp (河原温研究室内)

SNC47077@nifty.com (河原温)

*送り状は学会ホームページ(<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>)からダウンロードしたもの又は本会報次項をコピーしてご使用下さい。

【事務局からのお願い】

●年度末になりました。恒例の会計決算の作業中ですが、今年も会費未納が多く、頭を悩ませています。一人でも多くの会員が会費を年度内にお支払い下さるようお願いいたします。納入に際しては下記の郵便振替をご利用下さい。一般5,000円、学生・院生3,000円です。

『メトロポリタン史学』投稿原稿用送り状

種別を○で囲む	論文 研究ノート・史料紹介 学界動向 時評・提言		
著者名	日本語		
	英語		
表題	日本語		
	英語		
本文(○で囲む)	日本語	英語	
	()枚	図	()枚
要旨(○で囲む)	英語	日本語	
ワープロソフト名	()		
又はワープロ専用機種名	()		
フロッピーディスクの種類	()		
連絡先			
〒			
住所			
氏名	Tel:		
	Fax:		
	E-mail:		
No.	受付: 年 月 日	No.	受理: 年 月 日

メトロポリタン史学会 (会長 佐々木隆爾)

〒192-0397

東京都八王子市南大沢 1-1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

Tel: 0426-77-2110 (木村誠研究室) E-mail: mshigaku@comp.metro-u.ac.jp

ホームページ: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/> 郵便振替: 00100-0-537287